

すくなってしまった。

我々はグラファイトの存在を隕石から推定している。隕石はニッケル・鉄合金を主成分とする鉄隕石・珪酸塩鉱物を主成分とする石質隕石・両者をほぼ等量含む石鉄隕石に分けられる。この石質隕石のなかに、コンドロールとよばれる直径数ミリメートルの丸い粒を含んだコンドライトというものがある。このなかでも特に水や炭化水素などの有機物を多量に含んだものを炭素質コンドライトと名付けるが、これには重さにしてシリケイトの10

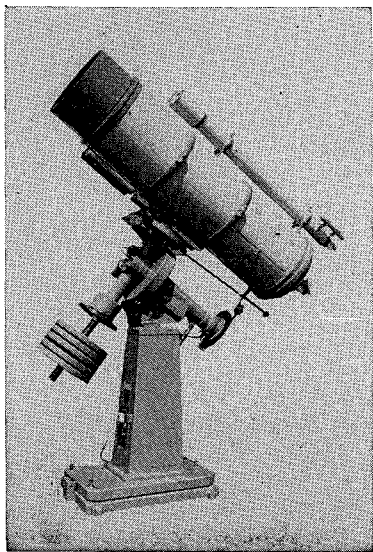
分の1の炭素がみつまっている。残念なことにこの炭素はグラファイトの形をしているわけではない。しかしこの比が隕石を産み出した原始太陽星雲の炭素量を反映しているとすれば、どこかでグラファイトができたかもしれない。これが隕石と母胎と同じくする彗星の‘芯’に水やシリケイトや鉄と同じように閉じ込められているのではないだろうか。はなはだ心もとない推測ではあるが、確めるためにひとつ彗星の‘芯’を捕えたらどうだろうかと思ったりしている。

人物往来

◇アメリカのミシガン州立大学のリンネル (A. Linnel) 教授が、夫人同伴で1975年3月中旬10日間にわたり日本を訪問した。東京天文台・岡山天体物理観測所等を見学したほか、東京天文台では「Computer Control of an Observatory」と題して興味ある講演を行った。リンネル教授は食変光星の光度曲線の理論、とくにコンピューター利用のための食函数の展開理論などで精力的な論文をいくつも出している。最近講演題目の

ように変光星の光電観測を主にした望遠鏡とコンピューターの組合せによる自動化の仕事に熱意をもやしている。

◇フランスのムードン天文台のセメル (M. Semel) 博士が、3月下旬より3ヶ月間の予定で東大理学部天文学教室及び東京天文台に滞在中である。これまで彼は主として太陽黒点及び活動領域の磁場の構造の研究をしてきた。滞在中に東京天文台乗鞍コロナ観測所においてフランスより持参したポラリメーターを使用して黒点やプロミネンスの偏光を測定するべく準備をしている。



天体望遠鏡
ドーム、製作

西村製の天体望遠鏡

40 cm 反射望遠鏡の納入先

- | | |
|--------|---------------------|
| No. 1 | 富山市立天文台 |
| No. 2 | 仙台市立天文台 |
| No. 3 | 東京大学 |
| No. 4 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 5 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 6 | 台北天文台 (TAIWAN) |
| No. 7 | 北イリノイズ大学 (USA) |
| No. 8 | サン・チェゴ大学 (USA) |
| No. 9 | 聖アンドリウス大学 (ENGLAND) |
| No. 10 | 新潟大学高田分校 |
| No. 11 | ソウル大学 (KOREA) |
| No. 12 | 愛知教育大学(刈谷) |

606 京都市左京区吉田二本松町 27

株式会社 西村製作所

TEL. (075) 771-1570
691-9580